

四十雀（シジュウカラ）は、しゃべる？

「愛鳥週間とは、日本において野鳥保護思想普及のために鳥類保護連絡協議会が設けた5月10日から16日までの一週間である。」（ウィキペディア）にちなんで、鳥の話題。



四十雀（シジュウカラ）
<https://frees-photo.net/archive/entry2243.html>

「世界初の『動物言語学』を学問として創設したのは、世界で初めて『野鳥が言葉を話していること』を突き止めた”鳥語博士”こと鈴木俊貴さん（東京大学）。…『シジュウカラの鳴き声は周りの仲間にきちんと意味を伝えているんです。』例えばタカを見た時に出す『ヒヒヒ』という声。この声を聞くと、シジュウカラはあたかもタカを探すように上を見上げる。ヘビを見たときの『ジャージャー』という声を聞くと、ヘビが潜んでいそうな地面や藪を念入りに探します。『シジュウカラは鳴き声を組み合わせて複雑なメッセージを作ることわかりました。』これまでに録音できている組み合わせは200パターン以上。その一つが『ピーツピ・ヂヂヂヂ』。『ピーツピ』は《警戒しろ》、『ヂヂヂヂ』は《集まれ》という意味で、それぞれ別々にも使われますが、組み合わせることもある。…さらに面白いのは、『ピーツピ・ヂヂヂヂ』と聴かせると、警戒して集まってくるのに、『ヂヂヂヂ・ピーツピ』ではそうした行動をとらないこと。言葉の順序を逆転させると意味が通じなくなるのだ。…彼らは鳴き声を単なる連続音ではなく1つのまとまった文章として認識するし、文法のルールを当てはめることで、聞いたことの無い新しい文章まで理解できる。」（<https://news.yahoo.co.jp/articles/b50c3b769e91eb62299bfa9ce62188f41bae8a3c7>）

これを書いているときも学校の裏山からは鳥の鳴き声が聞こえている。その鳴き声に意味があったとは驚きだ。一羽一羽の力は小さいが、仲間に警戒を伝えることで種を守ろうとしている。鈴木さんはその鳴き声でその鳥が言いたいことがわかるそうだが、四十雀の言葉を理解するだけで17年もの歳月がかかっているらしい。群青 Vol.58 に「大学の先生は、教育者であると同時に研究者です。正解がない問題に挑んでいます。…そして調べたり研究したりした成果を、論文や本にして世の中に発表し、世界を良くしています。＜『偏差値45からの大学の選び方』山内太地（ちくまプリマー新書）＞」という文章を載せたが、まさにこれは大学の先生の仕事だ。

2 学年の学年通信『Wisdom』、3 学年の学年通信『恕（じょ）』

学年通信が各学年から出されている。各学年の学年色の用紙に印刷され、各学年の生徒に配付されている。しかし、他学年の生徒が読む機会はあまりない。そこで、全校の皆さんに伝えたい内容の文章があったので、紹介する。

まずは、『Wisdom』より N 先生の文章。「高校2年生。今からちょうど20年前になります。（私は）教師になるような模範生とは縁遠い中学生活、高校1年生を過ごしていました。それでも見放さずに、指導し続けてくれる先生に憧れ、気がつけば将来の夢へと変わっていました。」人は、出会ったヒト・モノ・コトでできているということは常々伝えている。N 先生は、高校2年生の時に、まさに人生を変える出会いがあり、将来の夢が芽生え、努力し、その夢を叶えて今、姫路別所高校の教員をしておられる。「見放さずに指導し続けてくれる」ことに気付いたことがプラスに作用した。チャンスは誰にでもある。先生からの指導を「うるさいな」で無視していたら、そのチャンスを見逃していただろう。「ありがたい」と思ったからこそ、そのチャンスをものにし、今の N 先生がある。今度は、君たちが気付く番だ。

次に、『恕（じょ）』から K 先生の文章。5月4日に次男がご誕生になり、その時感じたことを文章にしておられる。「出産直後に我が子を抱いた時はジーンとくるものがありました。命がけで大切な宝物を産んでくれた妻と無事に生まれてきてくれた我が子には感謝しかありません。出産や普段の子育てをしている中で強く感じるのは、やはり母の偉大さです。…（さまざまな）体の不調、そんな状態で10か月も過ごし、命がけで出産し、自分のことは後回しで寝る間も惜しんで我が子を育てる。…皆さんのお母さんもきっとそうやって大切に君たちを育ててくれたのだと思います。」諸事情により一緒に暮らせない人もいるが、一人ひとりに預けられた大切な命にかわりはない。

※（ ）は筆者追記

使命があるから今そこにある。その使命を見つける旅が人生そのものだ。感謝する心を備え、チャンスに気付く感性を磨き、人と人との間で生きる、それが人間。